

甲南大学 総合研究所報

甲南大学総合研究所 神戸市東灘区岡本8-9-1 電話(078)431-4341

第11回公開講演会 国際化時代と複眼思考 — アジアからみた日本 —

講師 静岡県立大学教授 金 両基

総合研究所は1990年5月18日午後3時から10号館2階1021講義室で金両基氏を招き、公開講演会を開催した。同氏は、1933年東京生まれで、早稲田大学文学部卒、ソラボール芸術大学客員教授、韓国中央大学客員教授、カリフォルニア・インターナショナル大学教授を歴任、専攻は比較民俗学・比較文化論・東洋演劇。1979年芸術祭優秀賞、1984年ラジオたんぱ第1回アジア賞を受賞、著書には「キムチとお新香——日韓比較文化考」(中公文庫)、「能面のような日本人——日韓比較文化論」(TBSブリタニカ)、「韓国仮面劇の世界」(新人物往来社)、「日本人か韓国人か——今こそ在日同胞文化の創造を」(サイマル出版会)、「若い韓国人とつきあう法」(リヨンブックス)、「ハンゲルの世界」(物語韓国史)(中公新書)、「仮面世界与白色世界——日本文化与朝鮮文化的世界」(中国語)、「韓国民俗の恨——日本文化から照射した韓国の伝統文化」(韓国語)などがある。以下は当日の講演要旨である。



講演要旨

国際化という言葉が頻繁に使われ、日本は国際化を内外にPRする時代に入っています。国際化という言葉は5～6年前の『外交白書』に「日本は地球上で孤立化しては生きていけないので、今後国際化を進めなければならない。」という脈絡で登場してきました。そうすると日本の国際化は日本人のための国際化ということでしょうか。貿易立国の日本が貿易をスムーズにするための国際化、日本が得する

ためだけの国際化は本当の国際化と言えるでしょうか。摩擦を解消するために生まれた国際化ならば積極的に摩擦の要因を考えるべきであるが、日本人はそこを考えないで言葉だけが一人歩きしているので、あちこちで摩擦がおきます。国際化とは外から見ても内から見ても国際化でなければならないと考えます。

国際化とは異文化との出会いから始まります。身につけているものや日々の食卓を見ても明らかのように、物の国際交流は進んでいるが心は依然として国際化されていません。国際化を考えるきっかけは意識を働かせば自分の目の前にいくらでもあります。

国際化には、しやすいものとしにくいものがあります。国際化しやすいものは経済と人の交流で、しにくいものは政治と宗教そして生活文化です。経済には摩擦があるが、これはお金か物で解決がつくが、経済摩擦が昂じると文化摩擦が起きます。こうなると対話の糸口は切れてしまい、日本はそういう段階

にきています。同じアジアの中にも文化の違いはあり、これはよし悪しの問題ではありません。自分のメジャーだけで異文化をはかってしまい、文化の違いに目を向けなければ相手のことはわからないし、対話ができなくなってしまいます。

さて、アジアは日本をどう見ているかと言えば、日本を近代化をなしとげた制度面でモデルにしようとする、つまりシステムモデルとして日本を見習おうとする見方と、他方で民族感情からは日本をまだ信用できないという見方があり、そこには二律背反の感情があります。これは文化摩擦と歴史摩擦に起因すると考えられます。中国、韓国と日本を比べると、それぞれ生活文化は違うが、日本では知られていないことがまだ多くあります。また歴史においても、歴史は個人を越えるものだが、日本はそうではないと言ってきた時期もありました。はっきり言えば正しいか正しくないかの議論ができるが、はっきりしないので日本人に対する疑心暗鬼を増長させてしまいます。これは国際化時代に最も好ましくない態度です。

国際交流の基本的な認識は相手の文化と人格を認めることからスタートしなければなりません。地球は広く様々な人々が地球を形成しているという自覚が生まれるような交流をしないと交流はおまつりで終わってしまいます。共同体験ができる国際的な広場が国際交流の広場のあるべき姿です。

さて、盧泰愚の訪日について私は、これは韓国と日本だけの問題ではなく日本がアジアの一員であることの市民権をアジアで得るためのステップであり、韓国がイコールパートナーの時代を迎えるきっかけとなるような展望をもって進めて欲しいと考えます。人間のよし悪しを判断するのは人格と資質であって国家や民族によってではないが、日本は国家で個人をはかろうとします。歴史は過去のあやまちをくり返さないためにつみ重ねてきた人間の知恵であり、その知恵をふみつぶすことは日本にとって良いこととは言えません。自分の代に過去の歴史上の問題を整理しておけば、次の代に問題になることはないのです。

戦後、日本は時がたてば在日は風化すると考えました。しかし在日は今の状況のまま、帰化することも帰国することも拒絶しています。在日は自らが形成した社会ではなく、歴史のひずみが生み出したものです。在日が帰化して消滅しないのは、その歴史の重みにふみつぶされたくないという思いと、生



産的に生きていける自信とがあるからです。私は二つの異文化を同時に持っている人間です。かつてはこんな人間は信用されませんでした。しかし現在、私は私のような人間にこう語りかけるでしょう。「日本と韓国は隣り同志の国で、いがみあうよりは仲良くしたい。一つの国の文化だけを持っていると相手が見えてこない。あなたのように両方の文化、両方の眼を持っている人がいれば摩擦を回避できる。もし摩擦が起きてもそれをスムーズに回避する手立てを考えることができる。バランスのとれた感覚をもって一緒に歩いて行きましょう。」と。これを指して私は複眼思考と言います。これからは一人の人間が地球時代にどのようにすればどうと生きていけるかが課題で、その時にバランス感覚が必要になります。地球時代とは互いに手に手をとる共生の時代です。文化には質の違いがあるだけで上下の差はありません。文化を上下の差ではかろうとすると民族差別や少数派への差別が生まれます。異文化との出会いは皆さんの日々の生活の中にあり、これを内なる国際化と外への国際化という視点からみてほしいと考えます。

平成元年度研究課題報告

ハワイにおける『東京都湯沢町』の問題

河田 潤

去年(1989年)ハワイを訪れた観光客は、664万人であった。ハワイ観光局(1903年に作られたハワイ州政府公認のプロモーション公益機関)の調査によると、ウエストバウンド(ハワイ以西からの観光組)が470万人、残りの194万人がイーストバウンドである。我日本人は、前者で8万人ほど、後者でその約3分の2の124万人ほどが観光客としてハワイを訪れた。

我々日本人にとって「近くて近い」島ハワイ州は、今日ではアメリカ本土諸州に匹敵する生活水準を誇るまでに至ったが、経済基盤は、有力な地場産業を欠く不安定な構造に支えられていることに変わりはない。年間600万人を超える観光客を吸収する観光産業は、太平洋兩岸の景気状況に左右されるとはいえ、ハワイ州における年間総稼働仕事数の約3分の1を生み出す最重要産業であることに変わりはない。

この観光産業の隆盛は、砂糖やパイナップル産業の斜陽化とクロスするような形で、50年代後半に顕著になってきた。そのターニング・ポイントは、準州から州への昇格とジェット機の直行便サービスが開始した1959年だと言われている。それから30年、59年当時就業人口の約30%を占めていた農業人口は、1%までに落ち込み、それとは対照的に当時労働人口の11%(23万人)に過ぎなかった観光産業従事者は現在では40%にも達している。

では、ハワイの基幹産業になった観光産業を地域住民はどう考えているのであろうか。昨年(1989年)夏、州経済開発企画局は観光産業に対する住民の意識調査を実施、その結果を公表した。調査によるとハワイに住む人のほとんどが観光産業はハワイに「害」よりも「益」をもたらしたと感じており、個人的には観光産業から何らかの恩恵を受けていると思っていることが明らかになった。また、「戦時中休止していた客船の運行が再開されてハワイを訪れる訪問客は1948年、41,914人に増え、1951年になると、倍に急増し、以後、順調な伸びを記録して1967年には百万人を超える訪問客となり、1988年にはハワイ史上最高の6,142,420人の観光客が来島し」(ハ

ワイ観光局、12-28-89)、今年度上半期のハワイ訪問者数集計も前年比伸び率3.8%を示すなど数字の上でも好調である。

ところで、今日の第三世界の国々の多くが、農業や鉱業の衰退に代わりうる産業として観光産業の振興に力を入れていることはよく知られている。またそれが抱える問題点も多くの論者が指摘しているところである。ここで改めて解説する必要もないであろう。住民意識の面でも、数字面でもハワイの観光政策当局(特に、州政府とハワイ観光局)にとっては良いことづくめのものであるが、ハワイも世界的な問題点を多く抱えていることには変わりはない。

2、3その問題点を指摘しておこう。まず第一は、観光産業関連の仕事の大半が低賃金、不安定なサービス業である点、第二は、外国資本(最近では日本企業)による観光産業支配という側面。さらには開発と環境や安全な農漁産物の自前調達問題(例えば、卵の自前調達率は84%であったが、牛肉30%、果物類28%、魚25%、米に至っては全て輸入に頼っている。1987年統計)に関心を寄せるグリーン派が提起している問題。

これらの諸問題に今後ハワイがどう取り組んでいくのか。ハワイにとっては余計なお世話か知れないが、筆者はハワイにおけるこうした『東京都湯沢町』的問題をこしはばらくは考えていきたい。

(総合研究No.23:アメリカの社会と文化—移民社会ハワイの構造的分析—)

「隠されたもの」と「幻想の未来」

谷 口 文 章

本研究会も1年半が過ぎ、その性格と成果が明らかになってきた。個人の深層心理と社会の深層構造のメカニズムを解明すべく、活発な研究討論が14回にわたって続けられてきた。ここにその経過をエッセー風に述べたく思う。

1) 基盤としての「隠されたもの」

従来、唯一の真理を個人においても社会においても明らかにすることが、学問の営為と考えられてきたが、そのような不変の真理(実体論的思考から生

じる)を求めることが可能であろうか(筆者)。その観点からは、流動流転するリアリティーは充分に把握し得ないと思われる。自然科学における客体性、社会科学における合理性、人文科学における自我性などの概念は、それぞれの分野の主体性、非合理性、非自我性の問題を隠蔽してきたとも考えられる。実のところ、各分野における明るい側面、特定できる側面は、それぞれの暗い側面、不特定な側面に支えられて成立している。そして、現代のあらゆる学問分野では、不確実、非合理、非我的なものが出し、新たな知的地平が早急に求められている。したがって、個人と社会の背後に隠された統一者が問題とされねばならないであろう。

2) 個人における「隠されたもの」

文学の世界では、霊的次元の「無言」の影によって開示された、理性・言語を越えた世界(谷本泰三氏)や、自然主義文学におけるベシミズムとその深層解釈の問題(小出龍太郎氏)が取り上げられた。また、文学作品の言語的表現という表層と内容という深層の対立把握をさらに進めて、作品の背後にある根源的な古典的合意の上に成立した表現行為が問題とされた(寺島樵一氏)。

文学の世界は架空あるいは虚構の上に構築されたものと考えられがちであるが、むしろ人間の本性に根づく想像界がそこに展開されるからこそ、リアリティー迫る純粋な結晶がみられるのである。現実の現象のみ表現する場合は、「物語が、お行儀よく、上品な言葉で、善意に満ちて、信心深い語調で語られていけばいいほど、それをひっくり返し、裏側から読むことがたやすくなる」(バルト『テキストの快楽』)のであるが、心ゆさぶる文学は深層の見えざる根底に触れているのである。

さらに、深層心理学の分野からは、現実では考えられないが心性としてはあり得る世界創造の考えが示された(織田尚生氏)。たとえば、世界創造の神話・伝説は近親相姦によってなされることが多いが、それは、その深層の象徴的な結婚を儀礼として行うことによって、現実の行為は避けられ、心の安定感や社会秩序を得ていると考えられるのである。また、臨床場面で患児に接する場合、一方で子供の自我形成に母親の投影が見出され、他方母親は現実の子供のみならず彼女の内面にある子供像、ひいては家族全員の像を語ることになる。このように臨床心理でも、患者個人の深層心理だけでなく、患者の背景にある人間関係を洞察せざるを得ないのである(森茂

起氏)。

深層心理学は、個人の無意識の世界を分析するが、それを突き詰めれば普遍的なもの(世界創造や家族・人間一般)を考察せざるを得なくなる。そして興味深いことに、個人の意識から出発して無意識を経たあと、再び現実の分析に戻る。深層における「見えざるもの」が言語化されることによって、普遍性と現実的客観性を獲得していると言えようか。「心理的存在は、一個の理念がたった一人の個人の中に現れているだけといったような場合には、主観的なものです。しかし、このような理念が『一般的同意』によって一定数以上の人々の共有になった場合を考えると、それは客観的なものといえるのです。」(ユング『人間心理と宗教』)。

3) 社会における「隠されたもの」

まず、経済学の分野では、家計と企業は効用と利潤極大化の原理で動くとき常識的には考えられてきたが、人間は必ずしも合理的要因だけでなく、奢侈や名誉など非合理的な要因でも行動している。しかし、そのことは現在の経済理論では無視されるという非合理性や、また他方研究者という主体が、自己の理論を普遍妥当なものと考え、事実を無自覚に歪曲するという非合理性も存するのではないかと考えられる(永友育雄氏)。また、ウェーバーは、近代化・合理化の果てに「精神なき専門人」の登場を予言し、宗教なき時代の生と死の無意味化に言及し、近代合理主義のもつ負の問題性を伝えようとした(藤本建夫氏)。

このように考えられるとするなら、功利主義の実践と技術的合理性に立脚した従来の経済学の知識は、隠されたものを十分に明らかにできない。たとえば、労働の機械化・人間疎外・環境破壊・公害などが結果したのは、等身大の価値基準を越えて、エコノミー(家政、経済)がエコロジー(生態)から遊離し、自然の再生産の速度を無視したためではなからうか。「農業では、自然も人間と並んで労働する」(スミス『国富論』)。

次に医学の分野では、生きた人間からではなく、死体解剖から出発したことに象徴される近代・現代医学によって、病気をみて病人をみない医療、医者-患者関係の歪み、医原病や医療費の増加が生み出されてきたと考えられる(中川米造氏)。また、精神疾患の人々を排除するのではなく、彼らとのポジティブなコミュニケーションを試みる立場(杉林稔氏)や、病者である以前の人間存在に備わっている

「生きることの意味に対する意志の自由」を尊重する立場（小谷英子氏）は、言語・文化・制度・体制に抑圧されている現代人に示唆を与えてくれることになろう。

医学こそが患者を救うという神話は、人間の物化や差別、主体性の喪失を生み出した。医学モデルによって隠された人間・治療関係の在り方こそが反省されねばならないのだろう。「治療は時の経過による、しかし機会によることもある。しかし、医療は、このことを知りながらもあらかじめもっともらしい理説を頼りにこれを行うのではなく、実地に理説を配しながら行うのでなければならない」（ヒポクラテス『古い医術について』）。

4) 「隠されたもの」と「幻想の未来」

「人々は何も知らぬことを知るために、いかに多くを学ばねばならぬか、それを知る人のいかに少ないか」というドイツの古い諺があるが、人間の知が神のまえにいかに小さく虚しいかということを、人は今悟るべきである（佐藤明雄氏）。

現代は、新々宗教やオカルトブームの時代と言われる。なぜ、真摯な若者たちがそのようなものにひかれるのか。occultとは、「隠れた」、「神秘の」、「肉眼で見えない」、さらに「見えなくなる」、「明滅する」という意味がある。このような意味をもつ語によって表されるブームは、現代人が隠されながらも明滅している真理を垣間見ようとあえいでいることの証左ではないであろうか。つまり、現代のあまりにも明るすぎる状況が、影や闇への郷愁を生み出す。それは、草木が明るい世界を求め、枝を上へ伸ばせば伸ばすほど、大地の暗闇へと根を張らざるを得ないのと同じである。そのように、人間には明暗一体の基盤が必要不可欠なのである。

人間の精神文化および物質文明は、いわば一種の宗教的教理と考えられる。それらは「イズム」として、人間が価値あるものとして恣意的に信仰しているだけに過ぎないのではなからうか。「宗教的教理はすべて幻想であり、証明不可能で、何人もそれを真実だと思ったり、信じたりするよう強制されてはならない」（フロイト『幻想の未来』）と言われるように、現代の“高尚な”文化、“高度な”文明は幻想であって、隠された生命の土壌に根づかない宗教的イズムに墮ちているようだ。本来の宗教的なるものは、イズムにとらわれることなく、人間を越えたものとして実感されるべきものであろう。その意味で、人間の知的営為が「幻想の未来」を作り出して

いるとするなら、人間が畏敬せざるを得ないものに目覚めなければならないのではないか。さもなくば隠されたものを実感することなく、明確だと錯覚した幻想に人類の未来を託することになろう。

（総合研究No.24：人間の深層心理と社会の深層構造）

言葉のフィールド

斧谷 彌守一

「心とイメージ」という研究テーマのもとに何を特定のテーマとして選び取るか。私の場合は、本来文学畑の出身であり、このところ言葉というものに関心を寄せてきたということもあり、やはり、言葉に関係したテーマということになる。

その際に痛感せざるを得ないのは、一体自分の研究〈フィールド〉はどこにあるのか、ということである。というのも、言葉への関心を広げていくと、言葉で書かれた文学は言葉の領域の特殊な一小部分にしか過ぎないのではないかと、思えてくるからである。言葉の領域というものは、あまりにも広大で、捉えどころがない。文学だけを研究対象にしている間は、当然ながら、そのような迷いはなかったのだが。他の分野の方々が〈フィールドワーク〉という語を口にされるのを聞くと、誠に羨ましく思える。「ああ、この方々には然るべき〈フィールド〉というものがあるのだな。それに引き換え自分の場合は・・・」とついつい思ってしまうのである。

20世紀は言語の世紀である、などと言われる通り、今や、実に多様な学問分野で言葉の問題が扱われている——言語学、国語学、外国語学、社会言語学、心理言語学、神経言語学、心理学、神経心理学、認知科学、精神医学、哲学、社会学、文化人類学、言語人類学、動物学、記号学、情報科学・・・等々と枚挙にいとまがない。

そもそも、このような学問群の中に文学が立ち入っていこうとすると、何となく居心地が悪い。他の諸学が立派な学問的たたずまいを見せているのに対して、文学はいかにも没方法論的に思えてしまう。文学研究者の中には、そのことを飽き足らず思い、研究の方法論を他の諸学に求める人も多い。かくいう私も、元々、そのような人間の端くれだった、と言えよう。

詩の読解のために私が助けを求めたのは、これまで主として言語学と哲学だった。つまり、詩を解釈

する際に、ソシュールのシニフィアン／シニフィエの概念やハイデガーの言語論を援用しようというわけである。

そこで気づいたのは、言語学の文献に登場する文例が単純に過ぎる場合が多いということであり、哲学の文献には言語を論じながらもそもそも文例が登場しない場合があるということである。この点には不満だった。あるとき、かつてチョムスキーが＜Colorless green ideas sleep furiously.＞のような文は意味がないとしたという事実を知って、納得し難いと思ったこともあった。ちょうどツェラーンという難解な詩人を読み始めていた私には、その程度の文は十分に理解可能だと思えたのである。文学をやっている人間としては、ごく自然な感懐であった、と言えるかもしれない。

そうこうする内に、言葉そのものの方にも関心が湧いてきた。文学以外に言語論・言語哲学をも自分の研究領域にしたいという気持ちが芽生えてきた。そうしてみると、上述したように、一体自分の研究＜フィールド＞はどこにあるのか、ということが問題になってきたのである。

今、「心とイメージ」研究会の枠内での研究成果の一つとして、「語のシェーマの揺らぎについてー概念論序説」という論文をほぼ書き終えたところなのだが、そこでは、言葉についての自分なりの視点を模索してみようとした。そのためには、単なる抽象的論議の積み重ねではどうしようもない。たとえ演繹的アプローチを採ったとしても、議論を検証するためのデータが必要になってくる。そこで主に使うことになったのが、谷川俊太郎、ツェラーン等の詩だった。どうしようもなくお里が知れる結果となってしまったのである。

ただ、いつものように文学研究をやっているという意識で詩を読むのではなく、言葉そのものについて考えているという意識で詩を読んでいると、詩の言葉が言語論のための絶好の＜フィールド＞であるのではないか、論理的に割り切れない詩の言葉の世界が豊饒なく言葉のフィールド＞になり得るのではないか、とも思えてきたのである。

もう一つその論文でデータとして使わせて頂いたのが、『2歳から9歳まで こどものことば』（晶文社刊）という本に収録された子供たちの言葉だった。未だ論理的に整序されていない子供の言葉は、言葉について考える上で、実に刺激的だった。＜よるって いいにおいだねえ＞のような言葉が、論理化さ

れる前の言葉の姿を生き生きと実感させてくれたのである。ピアジェが自分の3人の子供の観察をもとにして理論を構築したことなども思い出されてくる。

論文を書きながら、言葉というものはあらゆる場所に偏在しているのだから、自分なりの視点がありさえすれば、文学をも含めて至る所に＜言葉のフィールド＞が見つかるのかもしれない、などという平々凡々たることに思い至ったというわけである。もしかしたら、現代にあっては、他の諸学にとっても事情は大して違わないのかもしれない、と試してみたりもするのだが、いかがであろうか。

（総合研究No.25：心とイメージ）

環境と文化 <研究会 記録>

(1) 高 阪 薫：海洋文化の伝統と環境 ——沖縄文学を中心として——

17枚の資料プリントに基づき報告された。お祭りを調査することによって沖縄の文化を見ることを試みた。ほとんど総べての島を探訪し、それぞれ独特のお祭りがあるのを知った。これらのお祭りのなかに見られる沖縄の生活と芸術特に祭りのなかで歌われる神歌をほり起こし沖縄文化の源泉を探しだす努力をした。作家島尾敏雄はヤポネシヤという言葉を使う、これは奄美を中心として沖縄諸島と日本列島を見るもので、アマミからはこの両方がよく見える。南と北の文化の複合からヤポネシヤ文化が成立したと考える。トカラ列島はヤマト文化とオキナワ文化の丁度中間に位置している。伝統的な神社の祭りには男神としての神官が居るが沖縄ではこれに対して女神である。ヤマトの神はご神体が鎮座しているが沖縄では神体がなく神が寄り付くイビがある。神依石 イビに神が寄って神がノロ（神女）にうつり、そのノロを皆が拝む。トカラではこれが混合した形態を示している。日本書紀、続日本記に言うタネ、ヤクは南西諸島を指していた。一方中国の記録にある流求は台湾を含めた南西諸島を指していたらしい。沖縄はヤマト側の呼名で琉球は中国側の呼名である。明治の頃沖縄内部に親清派と親日派があり紛争があった。14C～16Cには広く東南アジアに交易を拓げた、これは日本の商品を中国、東南アジアにもって行き、逆に商品を持帰る中継貿易で沖縄自身の産物はなかった。このような海外進出の気風からハワイ、南米には沖縄出身者が多い。

江戸期には日本との交流が途だえた。1609年に島津が沖縄に入り徳川氏の支配をうけ、中国からも冊封使による支配をうけていた。琉球王朝は明清から公認されていたが実質的には島津の支配を受け、琉球館に商人が入り出し交易していた。このなかで海洋性民族の特徴的な文化と文学を形成していった。

日本の文化は海を恐れ拒否する傾向があったが、明治になってからは積極的に海外に出る方向に向った。文学においても日本文学には驚く程海洋文学が少ない。昭和16年の国文学特集以後50年位海洋文学研究が出ていない。記紀万葉の時代には海洋性があった。日本列島を構成する島々の位置関係が把握されている。又海湖の区別が万葉人にはない。平安朝には海は恐ろしいものとして忘れられ陸の文化が中心となっている。遣唐使も派遣しなくなって海は全く忘れ去られた。江戸期は沿岸文化に終わっている。その頃でも沖縄は島津と清の支配を受けながらも海洋性の文化をもっていた。

日本文学：本土文学は抒情性の記述文学で個人の作者による作品を主とし、その創作は貴族、武士、隠遁者によっていたが、沖縄文学は叙事性の口承文学で作者は不特定の共同作品であった。13Cに文字が入り16Cに出版文化が始まっている。オモロ草紙はほとんどが叙事詩である。これは農耕文化と漁撈文化の相異であろう。神が海から来るのが沖縄で山から来るのがヤマトの信仰である。

(2) 谷口文章：心の環境と宗教

哲学には、伝統的に大きく分けて認識論、存在論、価値論の領域がある。実は、あらゆる学問はその体系の中にこの三つの領域がある。しかしあえてこのような問い方、分野の区別を自覚的におこなっていないだけなのである。ここでは種々のものの考え方を前提として、内的・外的環境と宗教について考察する。

まず、ものの考え方として「認識」的には、唯一の不変な実体という対象が存し、主観的なものは排除するという考えが常識的であるが、実際には、主体と客体の区別は考えられているほど明確化できず、むしろ両者が融合したところにリアリティが現象している。具体的に言えば見る視点が変われば同じ正方形も台形となり、ひし形にもなり得ること（射影幾何学）、ある共通の条件たとえば囲まれているという条件の下では、正方形も、長方形も、台形も、長円も、円もすべて同じ図形（位相幾何学）

であるということが理解できる。そのように、主体と客体が関与しつつ多様な認識が成立するとすれば、絶対確実で唯一のものは、対象・条件・仮説を限定しなければ「存在」しないことになる。さらに存在が、その人個人にとって、また人間にとってどのような意味をもっているかは、主観性のつきまとった感情による「価値」づけが必要となる。以上をまとめると、ものの考え方を広げるために、個々の専門分野の土俵を狭く限定するのではなく種々の土俵を包括できる、より大きな知的パラダイムが要求されるということである。

ところで、従来「環境」といえば、自然環境の問題、たとえば森林伐採、オゾン層破壊、砂漠化、酸性雨などが中心であった。しかし社会環境としての公害、食品汚染、奇形ザル、エイズなどの、社会的人間が関与する諸問題がある。さらに人間自身の環境から生じる非行、暴力、神経症、精神病などの問題も問われよう。否、自然環境、社会環境、人間環境の破壊や汚染は、「心の環境」破壊が根底にあることを忘れてはならない。すなわち、心的構えの歪みやそこから由来する幻想という心の環境破壊が、交感を忘れて自然を支配したり、公害をまきちらしながら社会において効率よく富を追求したり、自我意識の過剰によって病的な人間関係を生ぜしめているのである。

水俣病のある母親の体験からすると、外なる海（自然環境）が汚染されれば、内なる海（羊水）も汚染されて胎児性水俣病の子供を生むことになったと報告されている。私たちは、外なる環境を汚染した心の環境問題を根本的なものとしてとりあげねばならないであろう。

心の環境を豊かにし潤いあるものにするためには、均質・均等の時間・空間に生きるのではなく、濃淡のある生きられる時間・空間すなわち聖なる時間・空間にこそ、人間のヒュブリス（傲慢）を捨てて生きる必要がある。言い換えると、人間の心の環境を回復するためには、現代ほど「宗教的なもの」が必要とされることはない。これを基盤として、これからの人類の生き方（人生観）と環境（世界観）についての調和した知的パラダイムを考えていきたい。

（総合研究No.26：環境と文化）

<平成2年度に発行された研究所叢書>

- | | |
|--------------------------------|--------|
| アメリカのこども | No. 13 |
| イメージと文化 | No. 14 |
| 海浜社会の伝統と変容 | No. 15 |
| 戦後日本の社会文化 | No. 16 |
| 不確実性下における意思決定モデル
の経済・経営への応用 | No. 17 |

<平成3年度に発行される予定の研究所叢書>

- | | |
|----------------------|--------|
| 平生鈞三郎とその時代 | No. 18 |
| 女性と人生 | No. 19 |
| 近代イギリスの比較文化史的研究 | No. 20 |
| ヨーロッパ・アジアにおける「日本的経営」 | No. 21 |
| わが国の金融制度改革 | No. 22 |